

衆生済度としての施食会

坂本 道生（叡山学院）

現在、それぞれの宗派における食事前の作法（食時作法）では、自身が食事を摂る前に施食や施餓鬼を行うことを課している。仏教者たるものは常に衆生済度という問題を考えなければならないのであろう。

ところで、仏教儀礼の形骸化などと言われて久しい。元来、施食や施餓鬼は衆生の救済を目的とするものであるが、本発表では、中国における施食会・施餓鬼会の発展展開を通じて本来あるべき仏教儀礼のあり方について再確認を試みる。

本発表では、以下二つの論点を設ける。

第一に、施食や施餓鬼を実践する者の心構えに関して。施食や施餓鬼の典拠となった経論のうち、施餓鬼作法に大きな影響を及ぼしたのは実叉難陀（652-710）訳出の『面然経』と、不空（705-774）訳出の『焰口経』であり、両経の訳出は、施餓鬼の修法に新しい体系を生じさせ、唐末から宋代における施餓鬼会の盛行へと繋がった。宋代の慈雲遵式（964-1032）の施餓鬼に関する資料を検討すると、彼は施餓鬼作法の中で「観想」することの重要性を主張している。その遵式が重視する「観想」とは、慧思（515-577）や智顛（538-597）の思想を踏まえた上で、いま施す飲食は一切の餓鬼あるいは六道衆生に遍満せんと観想すること、そして自身が食する飲食も戒・定・慧の法身を養うものであると観想することであり、それは六波羅蜜行そのものであるという。遵式の施餓鬼作法における「観想」は、それを実践することで僧侶としての自覚を促すものであり、また一切衆生の救済を具現する為に常に保持すべき心構えであると言えよう。

第二に、遺族の苦や不安を解消することについて。施餓鬼会の発展形とも言える水陸会では、供養の対象が餓鬼のみならず六道四聖の十界へと広がり、さらには横死者の霊魂が重要な対象と考えられた。在来の中国思想において横死者の霊魂は、苦の最たるものであり、崇りをもたらす存在と考えられた。ゆえに、道教儀礼では先祖供養の際に血食（生贄）を供え、あるいは自殺者の霊魂に対する「放索」・溺死者の霊魂に対する「転水※（車十蔵）」などの儀礼を行うなど、懇ろに横死者の霊魂に供養してきた。一方、仏教では霊魂は崇りをもたらさない（すなわち、自身の苦は過去の業による）との考えから、施餓鬼を勧奨するのである。しかしながら、横死者の霊魂は崇りをもたらす存在に違いないとの中国人の思想は、その後の水陸会へと発展していく過程で取り入れられ、横死者の霊魂が供養の中心の対象となったのである。水陸会は一切衆生の救済を眼目とするが、「家」の思想に基づく先祖供養の実践、また崇りから逃れるための実践として、当時の中国人のニーズに即した儀式へと変容したと見られるのである。

以上、現代仏教においてヒントとなり得る事案を提示できればと考えている。

※は車偏に蔵

【キーワード】 施食、施餓鬼、水陸会、遵式